

授業づくりのための マトリクス図 活用術

東京都世田谷区立
深沢小学校主任教諭
日景 佐和子
(ひかげ さわこ)

1 はじめに

授業を組み立てるにあたり、どのような場面でのように評価するか、悩むことは多い。今回は授業づくりと学習評価について、マトリクス図を用いた授業構築の手法を紹介したい。

2 評価マトリクスの例「考えよう！ 持続可能な暮らしのために わたしたちのできること」

ここでは、5年生の「消費者としてお金や物の使い方を学ぶ」題材を例に説明したい。「持続可能な暮らしのために、わたしたちにできることは何だろうか？」と、学習題材の初めと終末に同じ発問をする。意見は様々出ることと推測される。しかし、児童が主体的に学んだ結果、どの程度のレベルの意見や思考が働くようになってほしいのか、どう変容してほしいのか、明確にしておく必要がある。

次のマトリクス図（図1）にある通り、評価Aの意見や思考は、教師が目指したい学習の到達点でもある。我々がどこまで意識して、どの程度まで学んでほしいと思うのかを、ここでしっかり意識化・言語化する。そうすると、児童からAの意見が出たり、Aの思考が働いたりするためには、教師がどんな教材を用意すべきか、抑えたい知識は何か、最後に書かせたいレポートの重要視点は何か、が明確になる。同時に、内容が指導要領から逸脱していないか、アンコンシャスバイアスが働いていないか、など、教師としての見落としはいけない部分のチェックもできる。評価したい項目があるときは、こうした図を用意しておくことで評価の軸もぶれにくく、児童の変容にも気づきやすい。

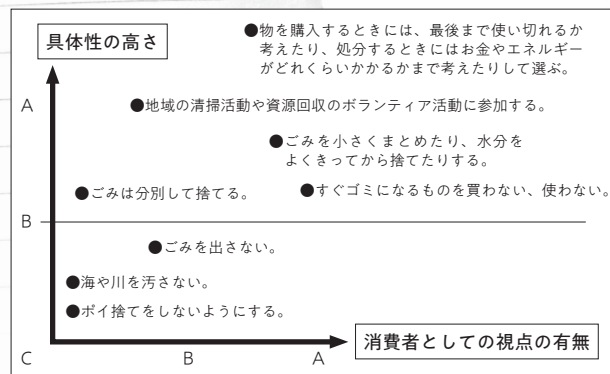


図1 マトリクス図

- 予め児童から出そうな意見・考えを座標上に書き出しておく。メモ程度でもよい。
- 児童から出てほしい意見や考え、育てほしい思考なども入れておく。

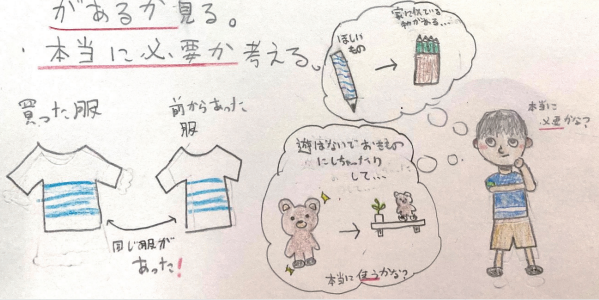
図1の通り、A方向の意見は学習活動を経てより高次の思考が働き、消費者や生活者としての視点が児童に育っていると予測できる。そして我々教師はC～Bに位置する児童をいかにAに近いところまで思考させることができるかを意識し、指導に臨みたい。よく出る意見の「ポイ捨てをしない」は、人として当たり前のことなので、評価としては低い。我々が学習到達点として求めているレベルではない。「ごみを出さない」は現代の生活において無理な話であり、こうした具体性のない意見や考えに対して「どのようにごみを減らすか」を考えるように児童を支援・指導することが求められる。予め書き出しておくことで、このC～Bに位置する児童へどのような声かけを行うのか、あるいは学習後の変容を期待してどのような仕掛けを行う必要があるのか、そこを検討し授業づくりに生かしたい。

私の場合はこの図をもとにごみ処分や分別の内容も学習に入れ、より消費者としての意識を高めるようにした。まとめにミニレポート「環境によい暮らし方を提案しよう」を児童に書かせる授業を行った。

【ミニレポート記入例】

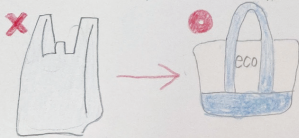
持続可能な暮らしのためにわたしたちができること(具体的な生活の工夫)

- ・ 買う前に その物や服の同じもの(似ているもの)があるか見る。
- ・ 本当に必要か考える。



持続可能な暮らしのためにわたしたちができること(具体的な生活の工夫)

ごみとなる物を減らすことが大切!
レジ袋を使わないためにいつもマイバックを持ち歩いたり、コンビニなどのプラスチックのスプーン、フォークは断ったりすることを一人一人が心がければ、プラスチックごみは減っていく。



持続可能な暮らしのためにわたしたちができること(具体的な生活の工夫)



3 その他の活用例

マトリクス図は「作品の工夫」の見取りにも活用できる。例えば、裁縫の学習でミニトートバッグを製作したとする。「これまで学習したことを活用して工夫しよう」という課題に、児童が取り組むと、作品にししゅうを施す、アイロン接着ワッペンを付ける、ポケットを作って縫いつける、などの様々な工夫が出てくることが予想される。それらの予測される活動を、技能の高低軸と機能性や装飾性の軸で分類する。結果として他にも様々な工夫があることがわかり、事前にどのような掲示が必要か気付いたり、どこまで指導するのか再検討したり、道具・用具や資材の準備にも考えが及ぶようになる。

ちなみに、児童がどのような考えをもっているのか、どの程度のレベルの知識を得ているのか、学習当初に把握しておく、早い段階で授業内容を検討し直し展開の予測を立てることができる。その際に役立つのが、「児童の変容を見とるカード」である。これは集約しやすくするため、タブレット端末を活用して配布、記入、回収を行う。本校では学習アプリ「ロイロノート」を活用している。

1枚のカードの中に、発問と2つから3つの回答枠を用意する。発問に対して、学習初めと学習後に児童が回答を記入して教師に提出する。例えば、前述のミニトートバッグ製作において、「学習したことを生かしてどのような工夫をするか考えてみよう」と発問する。児童の学習初めの回答は「ワッペンをつけたい」「ポケットがほしい」などの回答がある。まずは全員でどのような回答があるかを共有し、友達の考えから工夫のヒントを得る機会とする。その後、児童が気づかない工夫や様々な技法を教師が紹介する。先に教え込むのではなく、児童自身が「知りたい」「何かしてみたい」と自ら望んでいる状態を作り出すのがポイントである。なので、この初発の回答欄に何も書けない時こそ、児童が変容するチャンスととらえ、どのような手法でどう魅力的に提案するかをあらかじめ検討しておきたい。「何をしたらいいかもわからない」という児童のためにも、工夫のレベルを技能の高低差で分けておくと「ファスナーの縫い付けは難しいし時間もかかる」「アイロンワッペンは簡単につけられる、フェルトでつくるオリジナルワッペンは時間もかかるけれど世界にひとつしかないし、評価も高い」と、難易度と評価規準も明示できる。

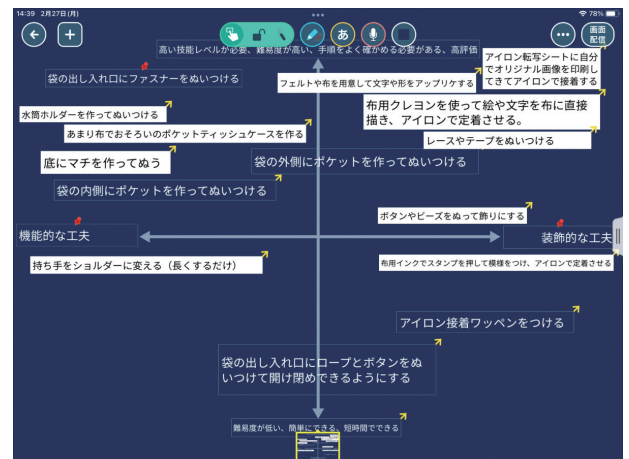


図3 マトリクス図活用例



図 4 製作見本を観察しロイロノートに考えを入力する場面

4 おわりに

児童の思考や視野を広げ主体性を高めるためには、教師自身が様々な方面で情報を収集し、スキルアップを図るようにしたい。私も自分のアップグレードを怠らないよう、日々努力していく所存である。